

2021年4月11日 礼拝説教要旨

詩編講解説教56「涙を受け止めるお方」

詩編56：9～14、ルカ7：11～17

詩編第56編にはとても印象的な言葉があります。「あなたの革袋にわたしの涙を蓄えてください」（9節）わたしたちは人生においてたくさん涙を流します。喜びの涙もありますが、ここでは「嘆き」とありますから悲しみの涙でしょう。今週、熊本地震から丸5年となります。あの経験も涙なしには語れない出来事です。家を失い、住み慣れた熊本を離れていった親しい友が何人もおります。見送るたびに「神ともにいまして」（405番）を歌いました。もう歌いたくないと思いました。涙の別れがそこにありました。そしてなかなか元の生活に戻ることができない。そういう苦悩を抱えている方々がたくさんおられます。人知れず流した涙も多いのではないのでしょうか。

5年ということで、熊本地震を特集した番組がいくつかありました。阿蘇大橋が崩落して一人の大学生が命を落としました。そのご両親がよくテレビに映ります。溪谷に向かって息子の名前を呼ぶお母さんの姿は多くの人の記憶に残りました。あのお母さんは本当によく涙を流されます。地震以来一体どれくらいの涙を流されたのでしょうか。息子を思い出すたびに涙が溢れて止まらない。子を持つ一人の母親の姿がそこにあります。ある詩編の注解書に、この詩の詠い手は女性だったのかもしれないというのがありました。それはこの9節が創世記にありますハガルとイシュマエルの話を連想させる。そこから示唆を受けた一人の女性がこの詩を詠ったのかもしれない。その可能性は否定できないと思います。

創世記第21章にハガルとイシュマエルの話があります。はじめアブラハムとサラの間には子どもが生まれなかったのでサラが女奴隷のハガルをアブラハムの側女にして、アブラハムとハガルの間にイシュマエルが生まれました。ところがその後アブラハムとサラの間にもイサクが生まれたので、サラはハガルとイシュマエルが鬱陶しくなり、夫に追い出すように言うのです。ひどい話ですが、それでアブラハムは心を痛めながらもハガルとイシュマエルを荒れ野に追い出してしまふ。荒れ野に放り出すことはイコール死を意味します。けれども神さまがハガルとイシュマエルを助けられます。このハガルとイシュマエルの話に「革袋」が出てくるのです。それと「涙」。ついでにもう一つ言うと、「ベエル・シェバの荒れ野をさまよった」とあります。「さまよう」というのが、「あなたはわたしの嘆きを数えられたはずです」（9節）の「嘆き」と訳されている言葉です。そこからこの嘆きをハガルの嘆きと関連づけるのです。

ハガルの涙というのは、捨てられる悲しみであり、自分が顧みられない悲しみです。居場所を失う。その結果、あてもなく彷徨う。現在のコロナ禍においても仕事を失い、自分が世の中から必要とされていないと感じて悲しむ人は多いと思います。特に女性がそういう立場に置かれていると言われていています。それこそハガルの涙を流している女性たちがたくさんいるのです。

さらにこのハガルの涙は、根本的にはわたしたちの罪の涙と理解することもできます。神さまとの約束を破ったアダムとエバは樂園を追放されます。もちろんハガルとは状況は異なりますが、捨てられ、あてもなく彷徨う存在になった。罪の世、死の世界に放り出される。この点においてアダムとハガルは共通しています。神さまのもとを離れ、居場所を失う。それゆえに流される、わたしたちの涙。アダム以来、罪ゆえに人類が流した涙はどれくらいあるでしょう。

今この時も多くの涙が流されている。暴力や差別を受けて流される涙、権力によって自由を奪われ弾圧される涙、ミャンマーの人々の涙、香港の人々の涙。でもその涙を神さまはきちんと受け止めてくださる。無駄に流される涙はない。そこに希望があり救いがあります。

一番悲しいのは、流される涙が誰にも受け止められないということです。「人知れず涙する」と言います。涙が無駄に流されること。本当はそれがあってはならないのです。だからこそ詩人は訴えるようにして、「あなたの革袋にわたしの涙を蓄えてください」と祈ります。誰にも知られなくてもいい。神さまが受け止めてくだされば、それで十分なのです。罪ゆえに嘆き悲しむ、この姿を見て憐れんでくださいと詩人は訴えます。

そして神さまはこの切なる祈りを聞いてくださいました。涙するわたしたちを憐れみ、顧みてくださるのです。それがイエス・キリストの救いとなって現れました。今日はナインのやもめの話を読みました。一人息子を亡くした母親を主イエスは憐れみ「もう、泣かなくともよい」と言われた。その母親の涙を受け止めてくださったのです。それゆえに「もう泣かなくともよい」と言われるのです。また同じルカの7章に一人の罪深い女性が涙で主イエスの足を濡らし、香油を主の足に塗る話があります。また主イエスがよみがえられた時も墓の外に立って泣いているマグダラのマリアに主は「なぜ泣いているのか」と言われます。このようなわたしたちの流す涙の一つ一つを主は受け止めていてくださるのです。

そして、ただ受け止めてくださるだけではない。もはや罪ゆえに無駄に涙を流さなくともいいように、十字架とよみがえりの御業をもって、わたしたちを神さまのもとに、樂園の中に連れ帰ってくださるのです。「あなたは死からわたしの魂を救い、突き落とされようとしたわたしの足を救い、命の光の中に、神の御前を歩かせてくださいます」(14節) この救いはキリストにおいて成就されました。人生に涙はつきものです。これからもたくさんの涙を流すでしょう。でもその涙を神さまが受け止めてくださいます。イエス・キリストは十字架においてその涙をぬぐい、よみがえりの命をもってわたしたちを命の光の中に導かれます。この救いがたとえ涙の中にあっても、わたしたちの本当の支えになります。